

## II 新宿研究会の追想

### 5. 新宿研究会の発足のころ

元新宿区長 中山 弘子

#### 1. 新宿のまちづくりへの思いと取り組み

私は平成14(2002)年11月末に新宿区長に就任したが、新宿のまちづくりは多くの課題を抱えていた。日本の治安が悪くなったといわれた時代で、歌舞伎町がその象徴として連日メディアを賑わし、小泉純一郎内閣総理大臣(当時)が「私も飲みに行ける街に」と歌舞伎町は治安回復のターゲットとなっていた。また、大久保・百人町のコリアンタウンの課題、新宿中央公園を中心としたホームレス問題などとともに、新宿の顔であり賑わいの中心である新宿駅周辺の再整備も新宿駅東西自由通路の実現を含め大きな課題であった。

区長に就任して日々直面する課題に対応する中で、私が新宿のまちづくりについて考え、重視したことは、以下の点である。

- ・まちは、人々が暮らし、働き、学ぶ場であり、また憩い、くつろぎ、楽しむ場である。それが本来の都市の姿であり、新宿区はこうした都市の機能をバランスよく持っている愛すべきまちといえ、その特性を維持すべきである。
- ・新宿のまちづくりには、新宿のまちが持っている江戸以来の文化的、歴史的、社会的な多様性を活かすことこそが重要であり、そこで暮らし、活動する人々の参画と協働が不可欠である。
- ・新宿区は武蔵野台地の東端に位置し、大地と低地が入り組む複雑な地形からなり、大名屋敷跡の新宿御苑、戸山公園などの緑は新宿の骨格の緑を形成し、低地に沿った神田川、妙正寺川、江戸城の外濠は水辺と緑の輪になっている。新宿の自然を見直し、水辺と緑を活かすまちづくりが必要である。
- ・新宿のまちの賑わいの源泉はビジターズ(来訪者)産業の活性化にある。再び訪れたいくなるまち・賑わい交流都市としてしての持続的発展に総合的に取り組み、新宿のまちの経済活動を支えることが必要である。
- ・都市のヒートアイランド化等環境問題が厳しさを増し、人口減少社会を迎えた今、新宿のまちづくりが目指す方向性は、都市の活力の源泉といえる賑わいや経済活動を持続的なものとするためにも、地球環境への負荷低減に配慮し、新宿の自然やまちの記憶を活かした暮らしやすさと賑わいが両立する持続可能な都市「歩きたくなるまち新宿」を目指すべきである。

そう考える中で、私は、歌舞伎町のまちの遺伝子を活かすエンターテインメントのまちづくり「歌舞伎町ルネッサンス」の取り組みや新宿駅東口モア4番街の道路を活用したオープンカフェの社会実験、新宿駅東西自由通路実現の機運醸成、護岸緑化や河川の親水化、立派な街路樹づくりなど水辺と緑の取り組み、建築物の耐震化を促進する減災社会づくり、景観まちづくりなど日々直面する課題に地元の皆さんや有識者の方々、多くの関係機関の協力を得て創造的に地道かつ迅速に事業を推進していた。また、幅広い区民の参画と協働による新たな新宿区基本構想の策定に向け、「新宿区まちづくりグランドデザイン」の有識者懇談会による方向性のとりまとめにも力を注いでいた。

## 2. 新宿研究会の発足

新宿研究会の発足は、以上に述べてきたような私が新宿のまちづくりに一定の方向性を持ち、手ごたえを感じ始めていた、区長に就任して2年に近づいた、そうしたところである。平成16(2004)年7月末の早稲田大学大隈会館「楠亭」における和やかながら意気込みに溢れた発足式も印象深く覚えている。

新宿区長として新宿研究会に深く関わるようになったのは、新宿区都市計画審議会会長を務めていた戸沼幸市早稲田大学名誉教授との新宿のまちづくりについての多くの機会を通じての意見交換や高橋和雄元助役によるところが大きい。区長に就任間もなく新宿区は区内の早稲田大学と「協働連携に関する基本協定」を締結しており、早稲田大学関係者に多くのご協力を頂いていたが、そうした中でも戸沼先生には前述の「新宿区まちづくりグランドデザイン」の有識者懇談会のメンバーとしてご意見を頂くなど格別にご指導頂いていた。高橋元助役は私の区長就任後1年足らずの間に任期満了で退任されたが、区長を支える区民組織の事務局長として支えて頂いていた。戸沼先生、高橋元助役ともにそれぞれの立場から長く新宿のまちづくりに関わり、多くの情報量と高い見識を持ち、かつ新宿のまちへの熱い思いを持った方である。



新宿区にとって喫緊の課題であった歌舞伎町のまちづくりを発進させ、多文化共生プラザを開設した後、私は新宿駅周辺地区のまちづくりに速やかに取り組まねばと考えていた。新宿駅周辺の街は、東口から西口そして南口へと反時計回りに発展してきており、私の区長就任当時は南口の開発が進展していた。そうした中、戦後60年を経て新宿駅東口地区は建物等の更新・再整備が課題となっていた。また、350万人の乗降客を数える日本最大のターミナル駅である新宿駅周辺の回遊性を高めることも長年の大きな課題であり、新宿駅東西自由通路の実現は地元の悲願であった。新宿発祥の地ともいえる新宿東口には老舗も多く、まちの発展を支えてきた担い手はまさに地元の事業者・旦那衆であった。今や新宿の夏の風物詩となった「新宿エイサーまつり」をはじめ多くの賑わいを商店街団体等まちの事業者が創り出し支えている。また紀伊国屋ホールでの邦楽の発表会といった文化活動も盛んである。戸沼研究室では新宿区と共同でそうした地元の多くの方々に新宿の歴史と将来像についてインタビューを行い、「新宿を語る」をまとめている。そこで語られた地元の方々の新宿のまちへの思いや現状への懸念・問題意識を受けとめて戸沼先生を中心に地元の担い手やまちづくりの専門家をメンバーとして創設されたのが「新宿研究会」であったと認識している。

新宿研究会の発足は、新宿区そして私にとっても大いなる応援団の誕生であった。まちづくりを進めるためには関係者の問題意識の共有と合意形成が不可欠であるが、その促進を図るため専門家の支援は欠かせない。私は地元の担い手である事業者が当事者となるまちづくりを進めたいと考えていたが、その機運醸成と仕組みづくりには工夫が必要と考えていた。新宿研究会には戸沼先生を中心としたまちづくりの専門家集団やまちの担い手である地元の方々が一堂に会したのであるから新宿駅東口のまちづくりを考える場として鬼に金棒といえた。

### 3. 新宿研究会の果たした役割

新宿研究会は、新宿区が幅広い区民参画で策定を進めていた新宿区基本構想・総合計画づくり、特に都市マスタープランづくりに大きく貢献して頂いた。中でも新宿駅周辺まちづくり方針に多くの提案が反映されている。「新宿の新たなまちづくり—2040年代の新宿の拠点づくり」として平成29(2017)年6月に東京都と新宿区によりまとめられた新宿グランドターミナル構想の原点といえる内容である。

また、まちの更新時期を迎えていた「新宿駅東口地区のまちづくり構想」の策定に地元の機運の醸成を含め大いに活躍頂いた。賑わいを先導するまちとして、現在の街並みを活かした歩行者優先のまちづくり・再整備を地元の商店街の皆さんと進めていきたいと考えていた新宿区にとって心強いパートナーであった。この間の活動があってこそ東口地区の商店街振興組合等が母体となった地元まちづくり組織「新宿 EAST 推進協議会」(竹之内勉会長)の立ち上げにもつながった。新宿 EAST 推進協議会は、東口地区の地区計画づくり・建替えルールの検討や建築物の更新に際し、まず課題となった駐車場付置義務に関する「新宿ルール」の策定など新宿区と協働し、成果を挙げている。今後も新宿通りのトランジットモール化など賑わい・交流を重視したまちづくりを新宿区とともに推進していくものと大いに期待している。

新宿研究会は、この新宿 EAST 推進協議会にまちづくりの専門性の観点から連携・参画し、時宜に応じたシンポジウムの開催などで活動内容の充実を図り、一体的・補完的ともいえる役割を果たしてきたと考えている。

### 4. 新宿研究会の収束

新宿区長退任後早いもので6年になるが、新宿のまちの持続的な発展を願う思いは変わらない。また、新宿のまちの多様な担い手に対する敬意は増すばかりである。そうした中、新宿研究会の収束についてご連絡を頂いた。新宿駅周辺のまちづくりが、新宿グランドターミナル構想に基づく新宿駅直近の都市計画決定や新宿駅東西自由通路の開通、大久保から西武新宿駅前通りへの補助72号線の開通など新たなフェーズへと歩みを進めるこの期に、新宿研究会が収束・発展的な解消を迎えたことは感慨深い。

新宿研究会は新宿駅東口地区の多くのまちづくりの提案を行い、まちの担い手を発掘し育てるという大きな役割を果たした。今後も新宿 EAST 推進協議会や新宿区の行政などの中で新宿研究会の活動が受け継がれていくものと思う。新宿区のまちづくり計画等に反映された「淀橋・追分・御苑 散策大路、散策小路」構想や新宿駅上空の人工地盤化の提案など、多くの人々の記憶に残るものといえよう。

新宿研究会の活動では、早稲田大学オープンカレッジ講座「新宿学」にも戸沼先生に声をか

けられ何度か足を運んだ。受講生の多様さと新宿のまちへの関心の高さに驚き、区長として励まされるとともに、新宿の持つ猥雑性も含めたまちの力を実感し、多様性を力とするまちづくりに邁進したいと意を強くしたものである。新宿のまちに愛着を持つ人々の交流の場でもあった新宿研究会に私も育てて頂いた一人である。新宿は何か新しいことが生まれるまち、時代を拓く遺伝子を持ちながらふだん着の似合う住む人々にやさしいまちである。界限の賑わいを大切に「歩きたくなるまち」として発展して行ってほしいと思う。

新宿研究会のこれまでの活動に大いなる敬意を表し、心から感謝を申し上げたい気持ちでいっぱいである。コロナ禍のもと、人々にとっての賑わい・交流の持つ意味が深く問われている今を考えると、それぞれの立場で活動続ける皆さんとまたいつかどこかの場で「賑わい交流都市・新宿」について楽しく語り合うことができることを願っている。

## 6. 新宿研究会活動の意義を振り返る

前新宿研究会副会長 青柳 幸人

今手元に新宿研究会発足時の古い名刺がある。その名刺を見ながら、既に亡なられた方々を含み、地元の皆さんの新宿への熱き志がよみがえる。

戸沼先生から新宿研究会への参画を要望されたのは長年の付き合いの他、新宿のまちづくりで、どこか再開発事業をという構想があった場合、事業経験のある私を、お誘い頂いたのではないかと思う。

新宿研究会は「まちづくり」の専門家集団として発足した。具体的な活動として、①地元商業者等からまちづくりへの思いを聞く、②その思いを将来構想案としてまとめる、③その将来構想案の実現を目指し新宿区へ提言し、調整することだった。

### 1. 地元関係者に新宿の抱える問題と将来への提言を聞く

まちづくりはまず地元商業者（地権者）等にまちの現状と将来についての意向を聞き、それをもとに行政の協力をえて、事業化していくのが基本であると思う。

研究会は独自の企画として、数回に亘り、地元商業者・JR・学経等からのヒヤリングを行った。また一方早大オープンカレッジ講座「新宿学」の講師として、より多くの地元関係者から、その者の歴史的展開や新宿の将来への提言を聞くことができた。

それらの今後のまちづくりへの提言を要約すると、①新宿駅東西南北の回遊性をたかめる。そのため新宿駅東西自由通路、東口広場の拡充、新宿通りのモール化、②新宿のまちは「なんでもあり」のまちであるが、落ち着けるオアシス空間、ファッション性のあるまちにしたい等であった。

具体的なヒヤリング先は 商業者関係で、老舗の伊勢丹・中村屋・新宿高野・紀伊国屋・柿傳・大阪屋や新宿コマ・商店街振興組合、鉄道関係でJR・京王・小田急、広域な区域を占める新宿御苑・花園神社宮司、新宿に一番古くから住んでいる内藤家第18代当主、また何回もお話しを聞かせて下さった新宿区長等である。

### 2. 新宿の将来構想を地元関係者の賛同をえて新宿区へ提言する

平成17年3月、研究会は初の新宿将来構想として、「新宿東口メガ広場構想」をRIA事務所の協力をえて作成した。この構想はJR、明治通り、靖国通り、甲州街道に囲まれた東口エリアを「メガ広場」と名づけ、エリア全体をひとつの巨大なネットワークの核・拠点と位置づけるものであった。この構想をもとに地元関係者や新宿区の担当部局に説明を行ったが、成案にはいたらなかった。

平成17年6月、新宿区は「歩きたくなるまち新宿」をテーマに、人々が回遊するまちについて構想を掲げていた。平成20年5月、研究会はこの構想とかねてから地元商業者等の提言を踏まえて「歩きたくなる新宿 淀橋・追分・御苑 散策大路 散策小路」構想を提言した。

この構想は新宿駅の東西をつなぐ空間のイメージを「緑の回廊」として、新宿区都市マスタープランの新宿駅周辺地域まちづくりの地区像に採り入れられた。



### 3. 新宿の歴史と文化の普及

研究会の活動分野は主に地元商業者等や新宿区と協調して、まちづくりを進めることであった。その他に新宿の歴史と文化を普及することもあった。

その歴史と文化を普及には、早大オープンカレッジ講座「新宿学」を活用した。この講座は平成4年から23年まで、220回開設された。生徒は延べ約7千人におよんだ。また講師陣は

戸沼先生を含む常任の4名の他、約40名に及んだ。その具体名は本稿1で掲げている。また講師の人々も講義に際し、改めて自社や新宿の歴史と文化を調べている。そしてその新しい視点を踏まえて、その普及を行っていると推察する。

その成果は新宿の歴史と文化に、新宿の未来図を加えて、平成25年紀伊国屋書店から「新宿学」として出版され、新宿区内の各町会や世間への普及に寄与している。